

飯田古墳群

範囲確認調査・緊急発掘調査報告書

— 平成27年度～29年度 —

2019年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田古墳群は、長野県飯田市域を中心とする天竜川右岸の段丘上に分布する古墳群です。

当地域は古くから古墳が密集する地域として知られてきましたが、近年の発掘調査により、その価値が次第に明らかになってきました。そこで、飯田市教育委員会では、文化庁・長野県教育委員会の指導・助言を受け、市内に所在する古墳の調査研究と保存活用を目的に、平成17・18年度に「市内主要古墳総合調査研究事業」、平成22・23年度に「市内主要古墳保存活用事業」を実施し、歴史的価値の顕在化に努めて参りました。その結果、当地域に分布する古墳を一体性のある古墳群として捉えることにより、古墳時代におけるヤマト王権を中心とした政治体制の変革や東国経営のあり方、中央と地方との関係性を観察するうえで高い価値を有するという認識に至りました。そこで、当市に所在する前方後円墳22基、帆立貝形古墳5基の総称を「飯田古墳群」と定義し、平成28年1月に文部科学大臣に史跡指定の意見具申を行いました。そして、文化審議会の答申を経て、平成28年10月に前方後円墳11基、帆立貝形古墳2基の計13基が史跡指定を受けました。

史跡飯田古墳群の周辺では、当時大陸から導入されたばかりの「馬」に関わる遺構や遺物が多数確認されています。さらに、巨石を用いたさまざまな形態の石室が多数残り、いわば「古墳の博物館」のような多様性も備えています。これらは陸上交通や軍事力の要であった馬の生産管理の地として、畿内と東国の中間にあるという地の利を活かした関係性の証拠であると考えられています。しかし、実態が未だに解明されていない古墳や未指定の古墳も多く、今後の確実な継承のためには継続的な調査が不可欠と考え、国庫補助金を活用した範囲確認調査、緊急調査を実施して参りました。本書は、平成27年度から29年度にかけて実施した3箇所古墳及び周辺遺跡の発掘調査の報告書です。

飯田市は古来より交通の要衝として発展を遂げ、他地域のさまざまな人やモノが往来する中で独自の文化を育み、現在に至っています。折しも、2027年にはリニア中央新幹線長野駅の開業が予定され、新たな高速交通網の時代に向けて地域遺産のさらなる活用が求められています。当市では、今後も史跡とその周辺の構成資産の価値を明らかにするとともに、史跡の追加指定を含めた取り組みを推進します。

最後になりましたが、発掘調査に際し多大なるご理解とご協力をいただきました地権者の皆様方をはじめ、本調査・報告書刊行に関係された皆様に、深く感謝を申し上げます。

平成31年3月

飯田市教育委員会

教育長 代田 昭久

例 言

1. 本書は、長野県飯田市における個人住宅建設・古墳の保存目的のための平成27年度～29年度飯田古墳群範囲確認調査・緊急発掘調査報告書である。
2. 範囲確認調査・緊急発掘調査は平成27年度～29年度に、整理作業及び報告書作成・刊行については平成30年度に、国庫補助事業国宝重要文化財保存整備事業として、飯田市（飯田市教育委員会生涯学習・スポーツ課）が実施した。
3. 緊急発掘調査は、平成27年度に御猿堂古墳・開善寺境内遺跡、兼清塚古墳の3遺跡2地点、範囲確認調査は、平成28年度に御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡の2遺跡1地点を実施した。なお、平成29年度は調査を実施していない。
4. 調査における発掘調査位置は、飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図の区画の以下に位置する。グリッド設定は飯田市新埋蔵文化財基準メッシュに基づき、業者に委託した。
御猿堂古墳・開善寺境内遺跡：LC94 22-16 兼清塚古墳：LC94 14-40
御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡：LC85 06-42
5. 本書に掲載した遺跡位置図は、飯田市都市計画基本図（1/2500）を1/2に縮尺して1/5000で示した。
6. 遺跡略号については以下によって調査した。
御猿堂古墳・開善寺境内遺跡：KZK957-6 兼清塚古墳：KSZK2043
御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡：MMSK386-1・MKH386-1
7. 用語については、文化庁記念物課 2013「発掘調査のてびき—各種遺跡調査編—」に準拠した。
8. 本書の執筆は羽生俊郎・春日字光・山下誠一が、編集は担当者の協議により春日字光が行った。なお、執筆は第1章・第2章・第3章3を山下が、第3章1-（1）・（2）・（3）・（4）、第3章2を羽生、第3章1-（4）遺物を春日が分担した。
9. 本書に掲載した写真撮影は、調査については各担当者、遺物については山下誠一が行った。
10. 本書に関連した出土遺物および図面・写真類は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館および飯田市上郷考古博物館で保管している。

本文目次

序

例言

本文目次・挿図目次・図版目次

第I章 経過	1
第II章 調査組織	1
1. 調査	1
2. 事務局	1
3. 指導・助言	1
第III章 調査結果	3
1. 御猿堂古墳・開善寺境内遺跡	3
2. 兼清塚古墳	14
3. 御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡	18
引用・参考文献	22
報告書抄録	31

挿図目次

挿図1 調査古墳・遺跡位置図	2
挿図2 御猿堂古墳・開善寺境内遺跡 調査位置図	3
挿図3 御猿堂古墳・開善寺境内遺跡 トレンチ全体図	3
挿図4 御猿堂古墳・開善寺境内遺跡 トレンチ平面図及び土層図	4
挿図5 御猿堂古墳墳丘・調査位置図	7
挿図6 御猿堂古墳出土円筒埴輪1	8
挿図7 御猿堂古墳出土円筒埴輪2	9
挿図8 御猿堂古墳出土円筒埴輪・ 朝顔型埴輪	10
挿図9 御猿堂古墳出土線刻のある埴輪・ 大刀形埴輪	11
挿図10 御猿堂古墳出土人物埴輪・須恵器、 開善寺境内遺跡出土縄文土器	12
挿図11 御猿堂古墳出土須恵器甕	13

挿図12 兼清塚古墳調査位置図	14
挿図13 兼清塚古墳トレンチ全体図 及び出土遺物	15
挿図14 兼清塚古墳トレンチ 平面図・土層図	16
挿図15 兼清塚古墳墳丘・トレンチ位置図	17
挿図16 御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡 調査位置図	18
挿図17 御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡 トレンチ全体図	19
挿図18 御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡 トレンチ平面図・土層図・出土遺物	20
挿図19 御射山獅子塚古墳墳丘・ トレンチ位置図	21

図版目次

図版1 御猿堂古墳調査前 御猿堂古墳調査区 全景 御猿堂古墳周濠（墳丘側より）	23
図版2 御猿堂古墳周濠（外側より） 御猿堂古墳遺物出土状況 御猿堂古墳調査区埋め戻し	24
図版3 御猿堂古墳円筒埴輪 御猿堂古墳朝顔形埴輪 御猿堂古墳須恵器甕	25
図版4 御猿堂古墳大刀形埴輪（正面・側面） 御猿堂古墳人物埴輪	26
図版5 兼清塚古墳調査前 兼清塚古墳調査区全景 兼清塚古墳1 トレンチ	27
図版6 兼清塚古墳2 トレンチ 兼清塚古墳 S Z001検出 兼清塚古墳 S Z001底部	28
図版7 御射山獅子塚古墳調査前 御射山獅子塚 古墳周濠転落石 御射山獅子塚古墳周 濠堀上がり	29
図版8 御射山獅子塚古墳周濠と墳丘 御射山獅子塚古墳トレンチ全景 松尾北の原遺跡 S K002	30

第I章 経 過

飯田古墳群は、飯田市の天竜川右岸段丘上の南北約10km・東西約2.5kmの範囲に、古墳時代中期から後期（5世紀後半から6世紀末）にかけて連続して築造された古墳群で、22基の前方後円墳と5基の帆立貝形古墳により構成される。古墳時代中・後期にみられるヤマト王権による政治支配の状況や東国経営の在り方を知るとともに、ヤマト王権を構成する地方社会を知る上で重要である。平成28年10月3日に、高岡第1号古墳・飯沼天神塚（雲彩寺）古墳・御射山獅子塚古墳・姫塚古墳・上溝天神塚古墳・おかん塚古墳・水佐代獅子塚古墳・大塚古墳・塚原二子塚古墳・御猿堂古墳・馬背塚古墳の11基の前方後円墳と、鏡塚古墳・鎧塚古墳の2基の帆立貝形古墳が国史跡に指定された。

飯田市教育委員会は、飯田古墳群の保存目的の範囲確認調査や個人住宅建設に先立つ緊急発掘調査を継続的に実施している。本報告書は、平成27年度～29年度に実施した範囲確認調査や緊急発掘調査について、平成30年度に飯田市考古資料館において整理作業を実施して原稿を執筆して本報告書を刊行した。

第II章 調査組織

1. 調 査

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 伊澤 宏爾 (27) 教育長職務代理 小林 正佳 (27) 教育長 代田 昭久 (28～30)
調査担当者	羽生 俊郎 山下 誠一
調査員	下平 博行 坂井 勇雄 澁谷恵美子 春日 宇光 (30) 福井 優希 (29・30)
作業員	伊東 裕子 今村 文一 木下由紀子 関島真由美 竹本 常子 田原 香 久田 誠 樋本 宣子 福澤 育子 中村地香子 松本 恭子 牧ノ内昭吉 宮内真理子 森藤美知子 森山 律子 中田 恵 吉川 悦子

2. 事務局（飯田市教育委員会）

教育次長	三浦 伸一
文化財担当参事	松下 徹 (28)
文化財担当課長	松下 徹 (27) 馬場 保之 (28～30)
文化財保護係長	馬場 保之 (27) 下平 博行 (28～30)
文化財保護係	木下 正史 (27～29) 羽生 俊郎 村山 博則 (30) 宮澤 圭 (28・29) 春日 宇光 (30) 佐々木佑里香 (28～30) 福井 優希 (29・30) 山下 誠一

*氏名後の（ ）内数字は、平成27～30年度のうちに異動のあった者の在籍年度を記している。

3. 指 導・助 言

文化庁 長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課



1 御猿堂古墳・開善寺境内遺跡 2 兼清塚古墳 3 御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡
 挿図1 調査古墳・遺跡位置図 (1 : 100,000)

第三章 調査結果

1. 御猿堂古墳・開善寺境内遺跡

(1) 調査の概要

- 1) 調査地：飯田市上川路957-6
- 2) 調査原因：個人住宅建設
- 3) 調査面積：20㎡
- 4) 調査期間：平成27年12月14日～25日
- 5) 担当者：羽生 俊郎
- 6) 遺構：御猿堂古墳周濠
- 7) 遺物：円筒埴輪・形象埴輪・須恵器・
縄文土器



挿図2 御猿堂古墳・開善寺境内遺跡調査位置図

(2) 遺跡の立地等

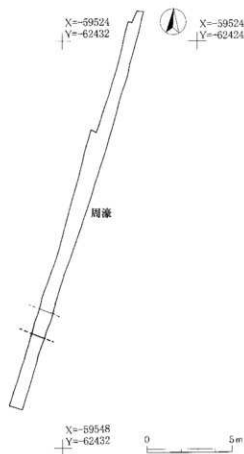
市街地の南6kmの竜丘地区の南端に所在し、天竜川支流久米川の左岸の最低位の段丘上に立地している。本古墳は6世紀前半とみられる墳丘65.4mの前方後円墳で、無袖式の横穴式石室を有し、重要文化財 画文帯四仏四獣鏡が出土したと伝わることで知られる。平成17年の墳丘北側の試掘調査により、二重の周濠を有する古墳であることが確認された。

開善寺境内遺跡は縄文時代から近世に至る集落跡であり、瓦の出土から古代寺院が存在したと考えられている。

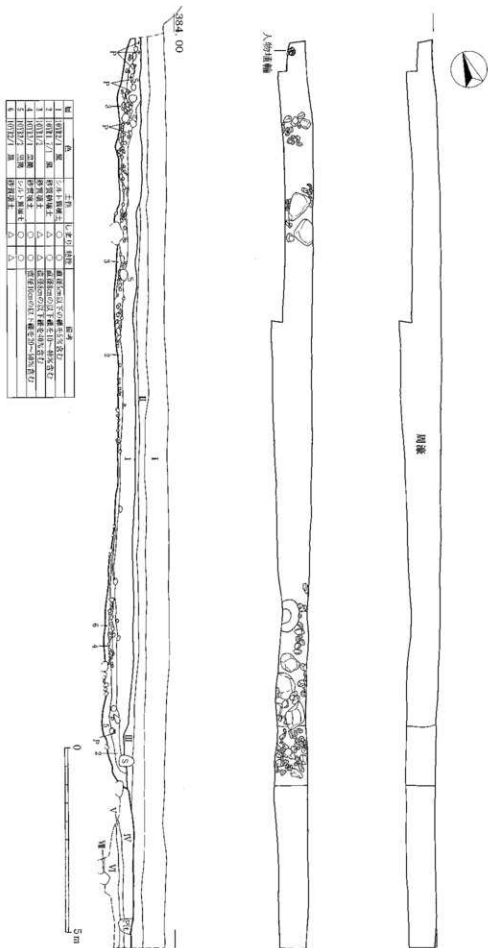
(3) 調査の経過

平成27年9月18日付で、調査地在住の個人より、住宅建設に係る埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該地は御猿堂古墳の南側に隣接する場所であり、同古墳の周濠の分布が予想されることから、確認調査を実施し、改めて協議を行うこととした。

12月14日に重機で表土を掘削し、同日より人力による検出・遺構の部分的掘削、実測、写真撮影を行った。調査区等の測量は12月16日に南エムツークリエーションに委託実施した。調査終了後は山砂により遺構を保護した後に埋戻しを行い、現地作業を12月24日に終了した。



挿図3 御猿堂古墳・開善寺境内遺跡トレンチ全体図(1:200)



挿図4 御猿堂古墳・開善寺境内遺跡トレンチ平面図及び土層図 (1:100)

(4) 調査所見

1) 土層堆積

現地表面からⅠ層：造成土（山砂 層厚50～60cm）、Ⅱ層：水田層（10YR 4/1 シルト質壤土 層厚20cm）、Ⅲ層：水田床土・造成土（10YR 2/2 砂質壤土 層厚0～20cm）、Ⅳ層：旧表土（10YR 4/2 砂質壤土 層厚20～40cm）、Ⅴ層：漸移層（10YR 5/3 砂土 層厚20cm）、Ⅵ層：地山砂礫層となる。

2) 遺構

墳丘のくびれ部付近から南北方向にトレンチを設定した。漸移層を掘り込む、幅20.2m以上、深さ0.4～0.8mの掘り込みが確認され、御嶽堂古墳の周濠と判断した。墳丘側で徐々に浅くなっているが、上端と明確な下端は調査区内で確認できなかったため、周濠の幅の数値は不明である。周濠の外側4m余りでは、外濠は確認できなかった。

周濠内の墳丘側を中心に、円礫が埴輪片と共に出土しており、墳丘から崩落したものと考えられる。土層の断面観察で小柱穴が確認できる他は、古墳以外の集落跡に関わる遺構遺物は確認されなかった。

3) 遺物

周濠に転落した埴輪が多量に出土しているほか、須恵器甕、甕の破片等が出土した。当地方の埴輪については強い独自性が指摘され、一般的な埴輪編年の直接の適用は難しいが、北條芳隆（1989・1993）や田中裕（2013）による緻密な検討がある。以下の報告は田中の分類を参考に記述する。

①円筒埴輪（挿図6-1～8-5） 完形は1点もないが、3条凸帯・4段に復元できるもの（6-1）がある。口径は概ね25cm前後であるが、基本的に器壁は2～3cmと非常に厚く、底部の幅は5cmに及ぶもの（7-1）も含まれる。透孔は全て円形・2孔であり、段ごと互い違いに配置されている。黒斑は認められない。調整はタテハケとハケ目のつかない調整（板ナデあるいは布・革を用いたナデ）がある。ハケは幅の広いものと、後述の細かいものの2種に分けられるが、いずれもタテハケ後に凸帯が貼り付けられる。内面の調整は板ナデ、ハケ、両者を併用するものがあるが、いずれも粗く不規則である。

凸帯の形状は田中分類の「b」（厚みがあり断面が丸みを帯びる）、「c」（断面が台形）の2種が認められるが、凸帯bが多くを占める。凸帯cをもつ個体は相対的に少ないが、その中には細かいタテハケがつくもの（7-5、8-1・3）があり、やや薄手である。同様に細かいハケを用いる7-4は凸帯の痕跡がないため、形象埴輪の台部の可能性もある。

胎土は長石、石英を多く含んでおり、直径1～2cmの大礫を含む場合もある。色調は赤みがかかる土師質のものが多いが、円筒・朝顔・形象それぞれに白色のもろいものが含まれる。白色の個体には外面全体に赤彩が施されるもの（6-5）もある。

以上について総括すると、円筒形で3条4段以上、凸帯bの円筒埴輪が主体となる。凸帯bに加え、器壁が厚手で底部極大、透孔が小型である点は在地系A群の特徴であるが、窯焼成であり、タテハケを入念に行ってから凸帯を張り付ける普遍的な製作技法はB群の特徴を具えている。そのため、当古墳の円筒埴輪はA群の中でもB群の影響が強いA3群に該当するものが多いとみられる。一方、断面台形の凸帯cがつく個体（B群）も含まれており、A・B両群が混在する様相は田中の指摘する通りである。

②朝顔形埴輪（挿図8-6～8） 3点を図示している。色調は白色で、外面調整はハケが部分的に用いられるものもあるが、非常に弱いナデあるいは調整なしが主体となる。6・7は外反する口縁部付近の破片である。8は肩の部分で、幅が広く断面「M」字状を呈する凸帯をもつ。

③線刻のある埴輪(挿図9-1~8) 線刻が施された埴輪が一定量出土している。1は、円筒埴輪の最上段にのみタテハケが施され、その上から斜格子状の沈線が刻まれている。下の段にはハケによる調整は一切施されない。また、口縁部に向かうにつれて外反する器形は、直立する円筒形が多くを占めるなかでは特殊な形態である。2~8はそれぞれ小破片に線刻が認められるもので、格子、円形、直交する沈線および不規則な文様が施されるものである。

④形象埴輪 多くは埴丘寄りの周濠内に転落していた。人物、大刀形が出土しているほか、図示していないが他にも形象埴輪と思われる特殊な形状の破片が多数出土している。

a 大刀形埴輪(挿図9-9) 柄間から柄縁、鞘部にかけて残存する。色調は赤みがあり、胎土は精良である。タテナデ調整が綿密に行われ、一部にハケも認められる。柄縁に近い柄間の下半部には赤彩のある斜めに取り付けられた二本の帯状の粘土が残るが、これは勾金(護拳部)の一部の可能性があり、痕跡が柄間の上半部まで続く。柄間と鞘部の間には2条の凸帯で区画された箇所(鞘口)があり、ここにも赤彩が施される。内面には粘土帯の段の痕跡が明瞭に観察できる。

b 人物埴輪(挿図10-1、2) 頭部上半および手の一部が出土した。頭部(10-1)は鼻・耳の高さから頭頂部にかけて残るもので、埴堀に近い周濠内から出土した。色調は白色できめ細かい胎土を使用するが、非常に軟質で磨滅が著しい。人頭に近い大きさであり、後頭部に結髪と思われる部位が残ることから、女性埴輪の可能性が高い。顔面は頬や顎が粘土の貼り付けにより立体的に成形され、顔の正面や側頭部に赤彩が施されている。頭頂からやや後頭部寄りに外面側から小孔が穿たれている。内面はユビナデにより粗く調整され、一度開けた右耳穴の位置を修正した跡が明瞭に認められる。手(10-2)は手首から甲の付近であるが、摩耗・欠損が激しい。

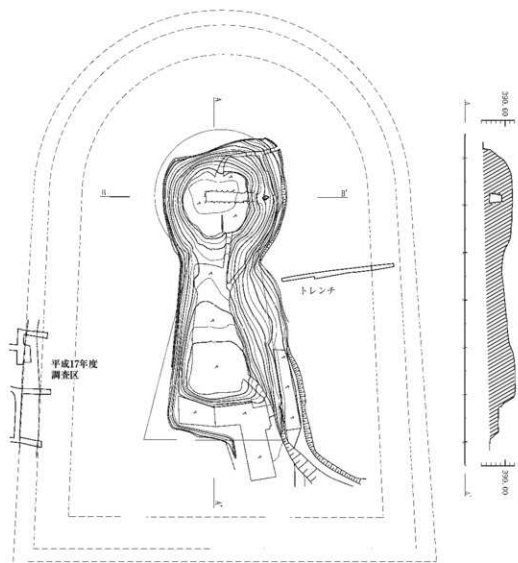
⑤須恵器(挿図10-3~5、11-1~10) 周濠内から須恵器の破片が出土した。10-3・4は甕、5は高坏、11-1~10は甕の破片である。甕は2個体分あり、双方とも小型の製品である。11-1の甕は頭部と胴部に分かれるが同一個体と思われ、外面にタタキ、内面に同心円状の当て具痕の残る大型甕である。これらの年代は陶邑編年におけるTK10型式を中心とする時期に比定できる。2~10については全て甕の破片である。器厚やタタキ等の特徴から、複数個体が存在した可能性が高い。

⑥その他遺物 縄文時代中期の土器片(10-5~7)から開善寺境内遺跡に係る遺構の存在が推定される。

(5) まとめ

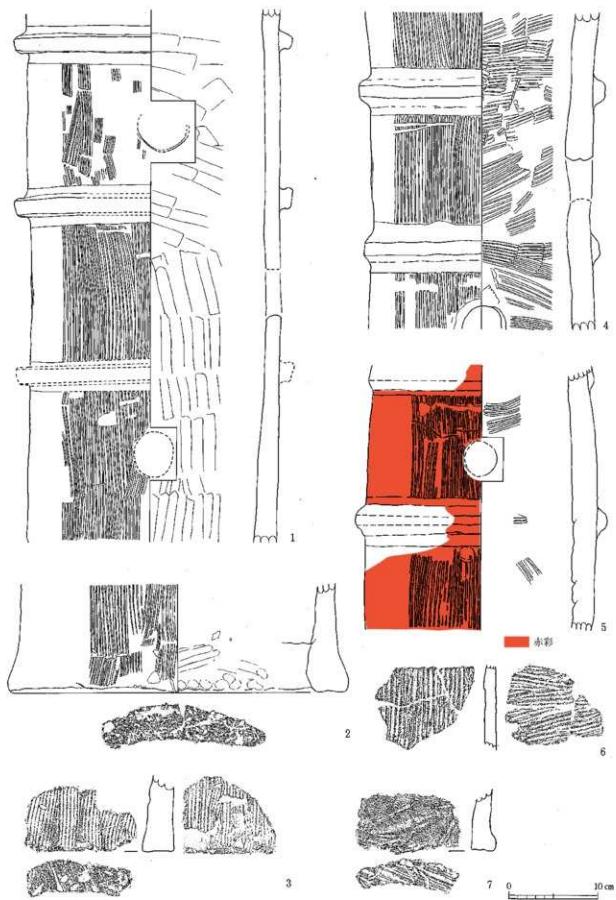
住宅基礎工事は、遺構検出面まで達せず保護されるため、本調査は不要と判断した。今次調査により、御狼堂古墳の周濠は浅く平らな底部となること、幅が当該地においては20m以上あることが確認された。また、本古墳の埴丘は、今次調査区の北側の埴丘の傾斜が緩くなっている。調査区の北側から形象埴輪が出土したことをあわせると、傾斜が緩くなっている箇所は、造り出しの可能性が高い。

これまでに当古墳の埴輪は表採資料の報告のみであったが、今回の調査で一定の数量が得られた。既に田中裕は当古墳の円筒埴輪について、在地性の強い「A群」と普遍的な特徴を備える「B群」が混在すると指摘しており、それが追認された部分もある。しかし、今回得られた資料はB類の影響を強く受けたA群(A3群、田中2013)に分類できるものが多く、人物、大刀形といった形象埴輪の多様性が改めて確認されたことも含め、さらなる検討が不可欠となった。これまで当地域の埴輪については関東、東海、北信地域との関係がそれぞれ指摘されてきたが、今後も個々の資料の評価を進めるべきである。

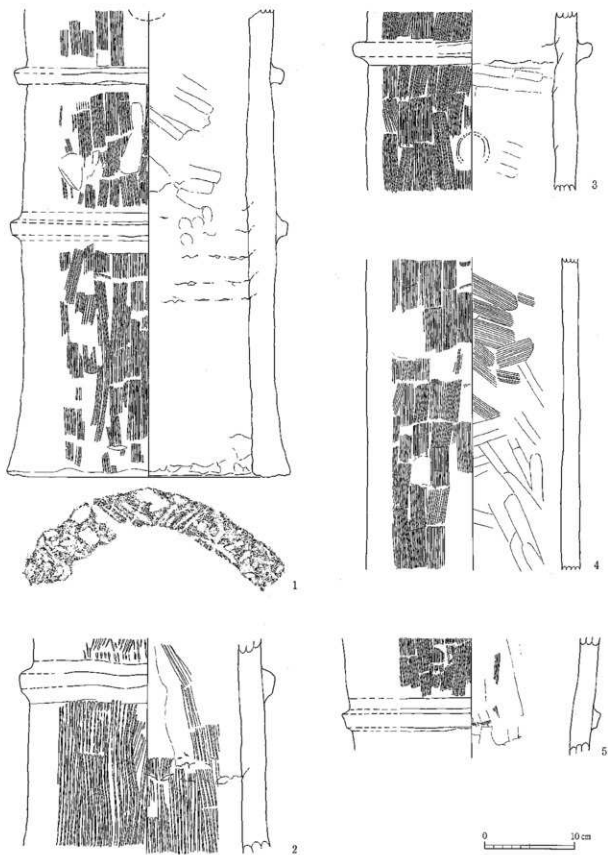


——	調査区等から復元した墳丘の範囲
- - - -	調査から復元した周溝の範囲

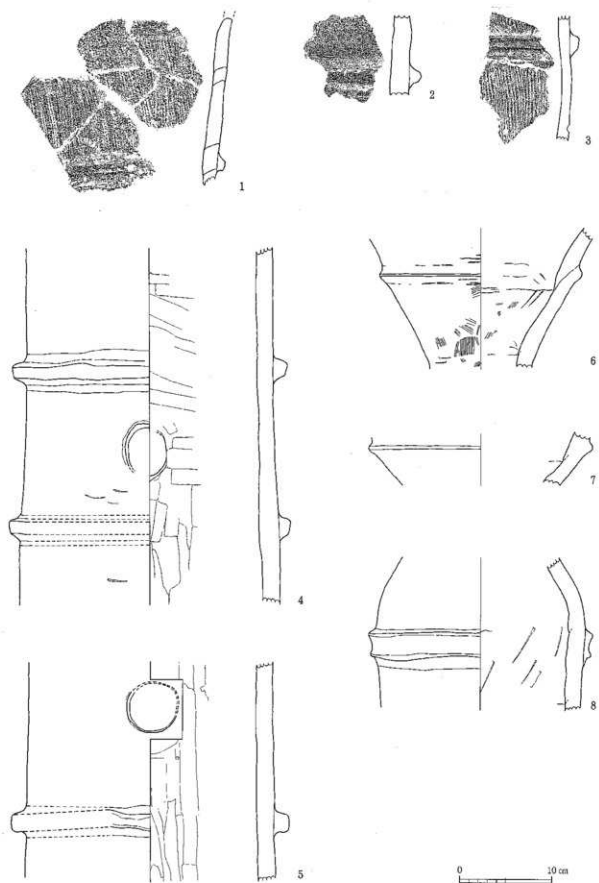
挿図5 御猿堂古墳墳丘・調査位置図 (1:800)



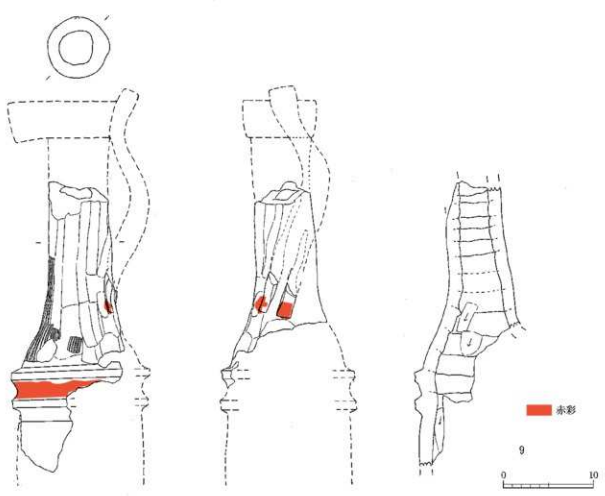
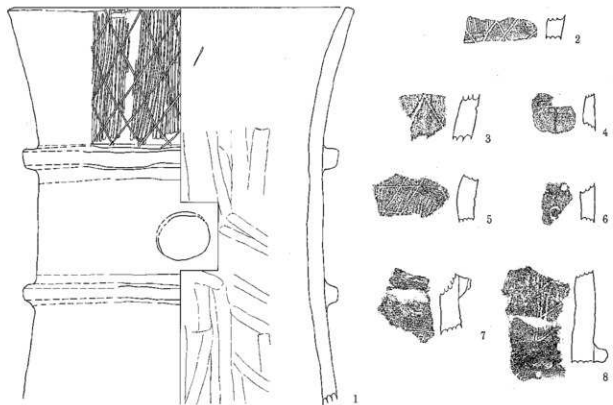
挿図6 御猿堂古墳出土土円筒埴輪1 (1 : 4)



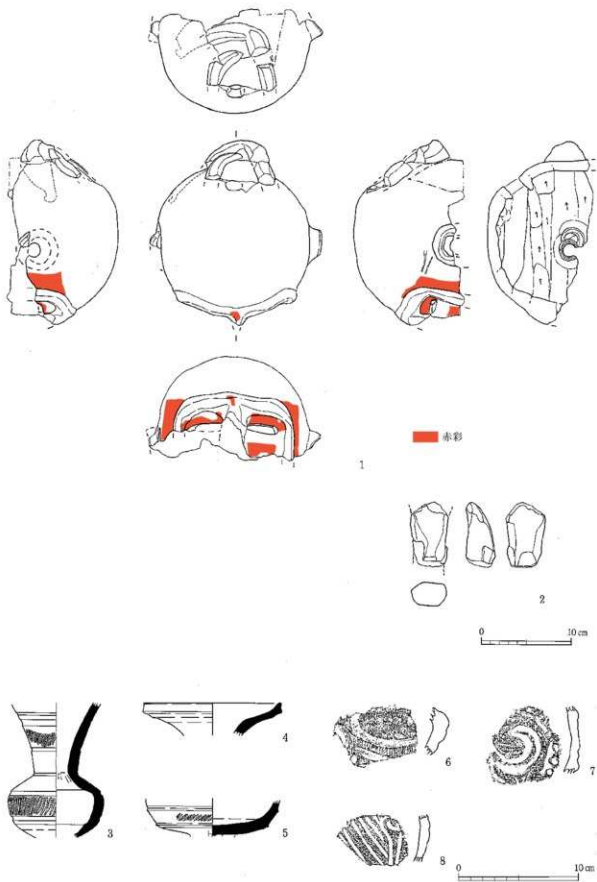
挿図7 御猿堂古墳出土土円筒埴輪 2 (1 : 4)



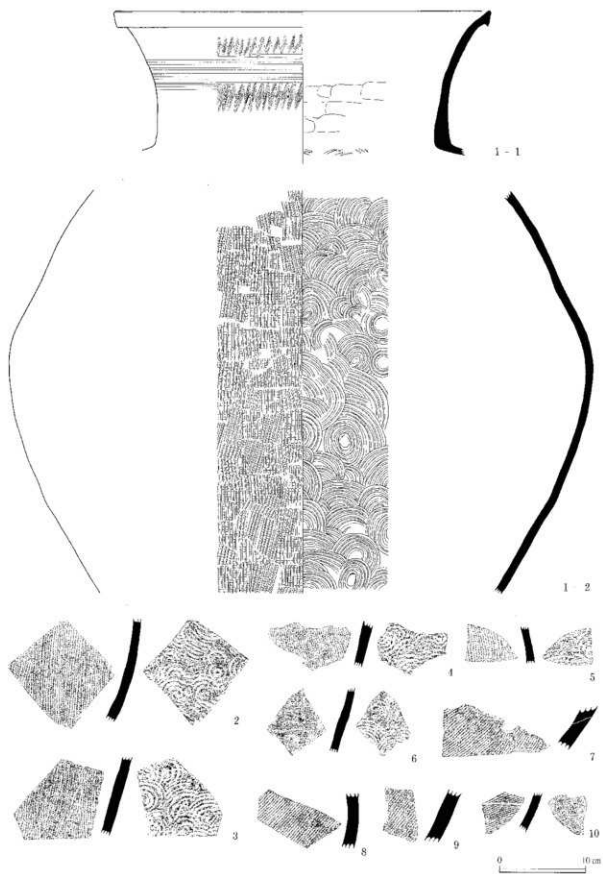
挿図8 御猿堂古墳出土円筒埴輪・朝顔形埴輪（1：4）



挿図9 御猿堂古墳出土土線刻のある埴輪・大刀形埴輪 (1:4)



挿圖10 御猿堂古墳出土人物埴輪・須恵器・開善寺境内遺跡出土縄文土器（1：4、1：3）



挿図11 御猿堂古墳出土須恵器甕（1：4）

2. 兼清塚古墳

(1) 調査の概要

- 1) 調査地：飯田市桐林2043
- 2) 調査原因：果樹伐根
- 3) 調査面積：18.5㎡
- 4) 調査期間：平成28年2月22日～3月17日
- 5) 担当者：羽生俊郎
- 6) 遺構：墳丘盛土層・集石遺構1基
- 7) 遺物：近代陶磁器・砥石



挿図12 兼清塚古墳調査位置図

(2) 遺跡の立地等

本古墳は飯田市街地の南5kmの竜丘地区の段丘上に立地している。前方後円墳であるが、100年ほど前に墳丘と石室が削平され、現在は楕円形の築山が残る。削平時に銅鏡・刀剣類・甲冑・玉類などが出土しており、5世紀代の古墳と考えられている。

(3) 調査の経過

平成28年2月19日付で、土地所有者より果樹抜根に関する埋蔵文化財発掘の届出が提出された。届出提出に先立ち協議を行い、抜根による墳丘への影響を鑑み、抜根と抜根部分の調査を並行して行って墳丘への影響を最小限に留めることとし、同年2月22日に調査に着手した。

調査区は、果樹を取り込む形で、墳丘の中央部のピークから南東側斜面にかけてトレンチ1・2を設定した。

調査は、墳丘盛土とみられる土層の堆積を確認できる段階まで、安全の範囲内で実施した。集石遺構が確認されたため、部分的な掘り下げを行い、諸記録を作成した。調査区等の測量は(有)エムツクリーションに委託実施し、調査終了後は山砂で遺構を保護した後に埋め戻して墳丘の形状を調査前に復した。

(4) 調査所見

1) 土層堆積

1層は表土、1～4層は、近・現代の遺物が混入しており、近・現代に堆積したと考えられる。7層以下は墳丘を構成する盛土で、5・6層は時期を決定できなかった。

2) 遺構

1 トレンチで墳丘の盛土を断面にて確認した。封土を掻き上げて盛土した様子が看取される。

2 トレンチで拳大から小児人頭大の川原石の集石(SZ001)を確認した。上部は果樹の根が蔓延っており、これと共に近現代の遺物が混在しており、原位置を留めていないと判断した。下部に近現代の遺物は混在せず、集石の底部は水平に近い傾斜となっており、外側・下側から順に積まれていったような配置である。原位置を留めている可能性が高いものの、集石の底部の構築時期を判断するには至らず、

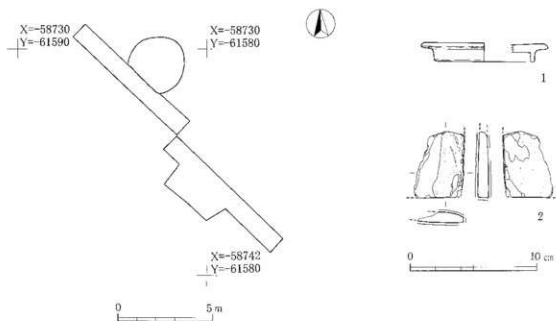
また上部の集石と平面的・垂直的に区分することはできなかった。

3) 遺物

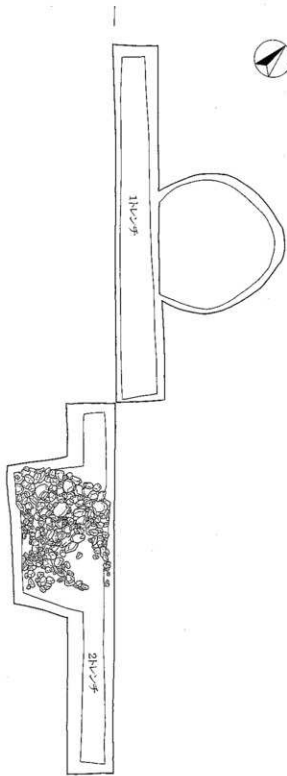
本古墳に関連した遺物は確認できなかった。2トレンチから出土した近世以降の鉄軸陶器の急須蓋(13-1)と砥石(13-2)を示した。

(5) まとめ

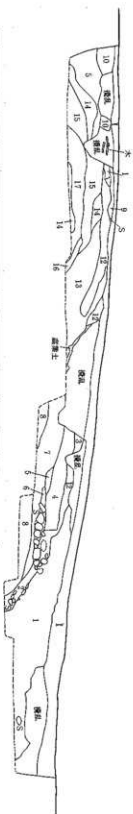
小規模のトレンチ調査であり、1トレンチ西部を中心に墳丘の盛土を掻き上げた状況が観察できたものの、それ以上の初見は得られなかった。集石は、目通りなど葺石の構築過程を示すものは確認できず、水平に近い配置であることから、墳丘の法面に貼られた葺石のイメージとは異なるものである。しかし、本古墳と並行又は継続する首長墓と考えられる塚原二子塚古墳では、テラス部分を有する階段状の葺石が確認されている(飯田市教委2012A)。本遺構もこれに類似した葺石であった可能性があるが、限られた範囲の調査であり、類例の増加と後考を待つこととしたい。なお、本遺構が前方後円墳の葺石であったとするならば、本遺構の墳丘脚(西脚)のラインは、前方後円墳のくびれ部に近い後円部の墳丘の平面形を反映している可能性がある。



挿図13 兼清塚古墳トレンチ全体図及び出土遺物(全体図1:80、遺物図1:3)

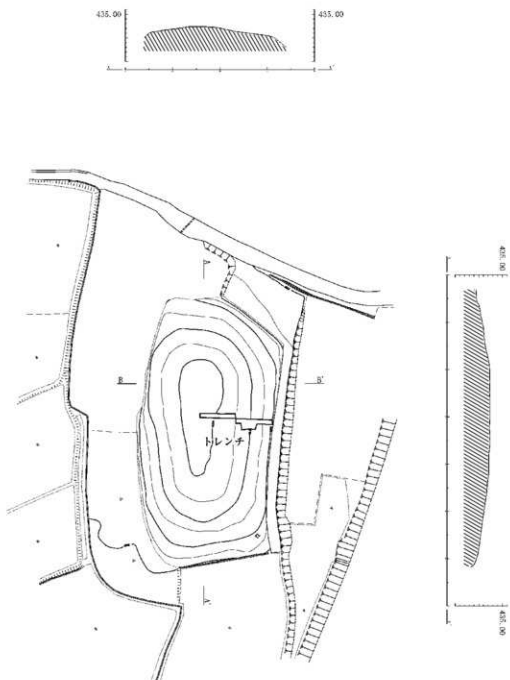


432-40



層	色	土質	土層の 状態	備考	層	色	土質	土層の 状態	備考
1	10H2/K 黄	硬粘土	△	○	10	10H2/K 黄	硬粘土	○	
2	10H2/K 黄	硬粘土	△	○	11	10H2/K 黄	硬粘土	○	
3	10H2/K 黄	硬粘土	△	○	12	10H2/K 黄	硬粘土	○	
4	10H2/K 黄	硬粘土	△	○	13	10H2/K 黄	硬粘土	○	
5	10H2/K 黄	硬粘土	△	○	14	10H2/K 黄	硬粘土	○	
6	10H2/K 黄	硬粘土	△	○	15	10H2/K 黄	硬粘土	○	
7	10H2/K 黄	硬粘土	△	○	16	10H2/K 黄	硬粘土	○	
8	10H2/K 黄	硬粘土	△	○	17	10H2/K 黄	硬粘土	○	
9	10H2/K 黄	硬粘土	△	○					
10	10H2/K 黄	硬粘土	△	○					
11	10H2/K 黄	硬粘土	△	○					
12	10H2/K 黄	硬粘土	△	○					
13	10H2/K 黄	硬粘土	△	○					
14	10H2/K 黄	硬粘土	△	○					
15	10H2/K 黄	硬粘土	△	○					
16	10H2/K 黄	硬粘土	△	○					
17	10H2/K 黄	硬粘土	△	○					

挿図14 兼清塚古墳トレンチ平面図・土層図 (1:80)



挿図15 兼清塚古墳墳丘・トレンチ位置図 (1:800)

3. 御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡

(1) 調査の概要

- 1) 調査地：飯田市松尾久井386-1
- 2) 調査原因：古墳の保存を目的とした範囲確認調査
- 3) 調査面積：21.8㎡
- 4) 調査期間：平成29年1月25日～2月2日
- 5) 担当者：山下誠一
- 6) 遺構：御射山獅子塚古墳周濠・土坑
- 7) 遺物：弥生土器・石器、土師器・須恵器・

中世陶器



挿図16 御射山獅子塚古墳・松尾北の原調査位置図

(2) 遺跡の立地等

本遺跡は飯田市街地の南東2kmに位置する松尾地区に所在し、天竜川右岸の低地段丘上に立地する。本古墳は5世紀後半とみられる墳丘58.0mの前方後円墳で、前方部が発達する形態となる。墳丘の一部が削られているが、全体として保存状態は良好である。石室については、場所や形態は不明である。周辺は8基の古墳で構成される茶柄山古墳群で、その内の茶柄山3号古墳は墳丘長が50mと推定される前方後円墳である。松尾北の原遺跡は、弥生時代の集落跡と中世～近代までの墓域等として把握されている。

(3) 調査の経過

平成28年度で御射山獅子塚古墳の周濠の状況を把握するための範囲確認調査を計画した。調査は地権者の了解が得られた平成29年1月25日から実施した。同日に重機を使ってトレンチを設定し、翌1月26日から作業員を使っての掘り下げを開始する。古墳の周濠等を確認し、順次遺構の掘り下げと写真撮影を実施し、2月1日にはトレンチ調査は終了する。2月2日に人力により埋め戻しを実施し、すべての作業が終了した。

(4) 調査所見

1) 土層堆積

I層：10YR 2/3 植壤土 耕土、II層：10YR 3/3 植壤土、III層：10YR 3/2 砂質植壤土、IV層：10YR 4/3 砂質植壤土、V層：10YR 4/6 植壤土 地山。I層～IV層は基本的に水平堆積をなし、自然堆積によるものと考えられる。古墳周濠の埋土は1～5層で、多くの転落石が混入していた。

2) 遺構

トレンチは、後円部南東側の墳丘裾から北西・南東方向に幅約1.6m・長さ13.3mに設定した。古墳の周濠であるS Z001と土坑S K002を調査した。

S Z001は御射山獅子塚古墳の周濠である。周濠は現在の墳丘より約2m程度南東側に離れた位置に立ち上がりを確認し、後世の耕作等により墳丘の裾が一部削平されていることが確認できた。東側の立

ち上がりは地山面が北東側に傾斜しているために明確には確認できなかったが、周濠内の土層・転落石により推定した。挿図18で示した石は底面付近のものである。周濠内には墳丘からの転落石が確認され、上層及び底面付近の2箇所にとままりがみられた。転落石は大小様々で、花崗岩を主体とする地山に含まれる石と同様なものであった。飯田松川の川原石もしくは周濠を掘った時に地山に包含された石を利用したものと考えられる。墳丘側の周濠基部や立ち上がりには葺石は確認されず、それを抜いた痕跡も認められなかった。周濠の規模は、幅6.0m・深さ60～30cmを測る。

SK002はトレンチ北西端部で検出した。平面形・規模は不明で、耕土下から掘り込まれていた。土層は10YR 2/2 黒褐色に10YR 4/6 褐色の一層でしまりのなく、一気に埋められていることが確認された。壁面付近に挿図18で示した丸い川原石が入れられていた。土層の状況から墳丘裾が削平された後のものと把握されるが、用途・時期とも不明である。御射山獅子塚古墳とは関連はなく、松尾北の原遺跡の遺構となる。

3) 遺物

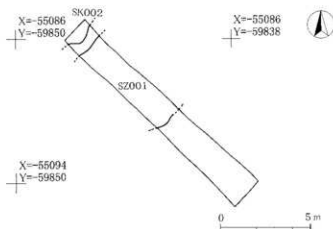
SZ001から、古墳時代の須恵器・土師器片、中世陶器片が出土した。脚部に刺突文が施文される須恵器蓋坏もしくは高坏（18-1）と、タタキをロクロによるカキメで消す中型壺（18-2）を拓影で示した。前者は透かしが確認される。

SK002から弥生土器片3点が出土したが、遺構に直接結びつくものではない。

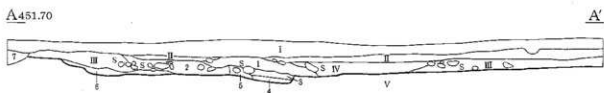
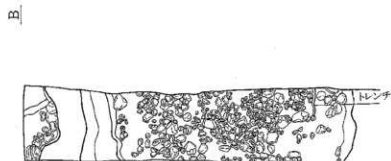
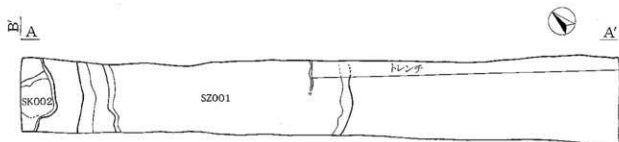
(5) まとめ

御射山獅子塚古墳周濠を調査した。周濠の立ち上がりが確認でき、現在の墳丘から2m程度であり、墳丘裾の削平はあまりないものと把握される。周濠内には石が確認され、墳丘の葺石が転落したものと把握される。ただし、周濠の立ち上が等原位置に残された石は認められなかった。周濠の外側の立ち上がりは不明確であったが、土層状況等から幅6mと推定した。さらにその外側を6m弱調査したが、再び落ち込む遺構は確認されなかった。

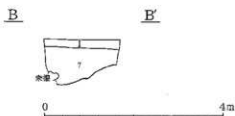
周濠から出土した遺物は土師器・須恵器等の小破片であった。須恵器については2点を拓影で示したが、確定した時期を示すことはできない。ただし、蓋杯もしくは高坏の脚部は、上下2段に透かしがある6世紀に位置づく形態の可能性が高い。御射山獅子塚の時期と齧鯨が生じるが、小破片であり、古墳に直接係わる遺物でない可能性もある。遺物などによる時期決定は、今後に残された課題である。



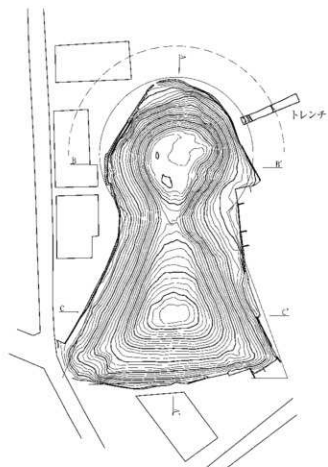
挿図17 御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡トレンチ全体図（1：200）



層	色	土性	測定値	特徴
1	15YR2/2 黒褐	砂質粘壤土	△	×
2	15YR2/2 黒褐	粘壤土	△	△
3	15YR2/2 黒褐	粘壤土	△	△
4	15YR2/2 黒褐	粘壤土	△	△
5	15YR4/2 灰色・黄褐色	砂壤土	△	×
6	15YR4/4 黄	粘壤土	○	△
7	15YR2/2 黒褐	粘壤土	×	×



挿図18 御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡トレンチ平面図・土層図・出土遺物 (1:80・1:3)



	観測点から掘出した墳丘の範囲
	調査から推定した周溝の範囲



挿図19 御射山獅子塚古墳墳丘・トレンチ位置図 (1 : 800)

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1996 「北の原遺跡（遺構編・遺物編）」
- 飯田市教育委員会 2007 「飯田における古墳の出現と展開―資料編・本文編―」
- 飯田市教育委員会 2012A 「飯田古墳群」
- 飯田市教育委員会 2012B 「開善寺境内遺跡」
- 飯田市教育委員会 2013 「飯田古墳群―論考編―」
- 田中 裕 2013 「伊那谷の埴輪とその系譜」『飯田古墳群―論考編―』
- 北条 芳隆 1989 「伊那谷」『断夫山古墳とその時代』第6回東海埋蔵文化財研究会
- 北条 芳隆 1993 「松島王墓古墳の埴輪」『伊那路』第37巻第11号



御猿堂古墳 調査前



御猿堂古墳 調査区全景



御猿堂古墳 周濠
(墳丘側より)



御猿堂古墳 周濠
(外側より)



御猿堂古墳 遺物出土状況



御猿堂古墳 調査区埋戻し



御猿堂古墳 円筒埴輪 (挿図6-1)



御猿堂古墳 円筒埴輪 (挿図7-1)



御猿堂古墳 円筒埴輪 (挿図9-1)



御猿堂古墳 円筒埴輪 (挿図6-4、7-2)



御猿堂古墳 円筒埴輪 (挿図6-5)



御猿堂古墳 朝顔形埴輪 (挿図8-6、8-8)



御猿堂古墳 須恵器甕 (挿図11-1)



御猿堂古墳 須恵器 (挿図10-3)



御猿堂古墳 大刀形埴輪
(挿図9-9)



同上 (側面)



御猿堂古墳 人物埴輪
(挿図10-1)



兼清塚古墳 調査前



兼清塚古墳 調査区全景



兼清塚古墳 1 トレンチ



兼清塚古墳 2 トレンチ



兼清塚古墳 S Z 001検出



兼清塚古墳 S Z 001底部

御射山獅子塚古墳調査前



御射山獅子塚古墳周濠
転落石



御射山獅子塚古墳周濠
堀上がり





御射山獅子塚古墳
周濠と墳丘



御射山獅子塚古墳
トレンチ全景



松尾北の原遺跡 S K 002

報 告 書 抄 録

ふりがな	いいだこふんぐん ほんいかく にんちようさ・きんきゅうはくつちようさほうこくしょ							
書名	飯田古墳群 範囲確認調査・緊急発掘調査報告書—平成27年度～29年度—							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
編著者名	羽生俊郎・春日字光・山下誠一							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel 0265-22-4511 Fax 0265-22-7969							
発行年月日	2019年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
御嶺堂古墳 開善寺境内遺跡	飯田市上川路 6022-1	20205	880 241	35° 27' 28"	137° 48' 44"	20151214 ～ 20151225	20㎡	個人住宅
兼清塚古墳	飯田市桐林 2043	20205	833	35° 28' 6"	137° 49' 16"	20160222 ～ 20160317	18.5㎡	果樹伐根
御射山獅子塚古墳 松尾北の原遺跡	飯田市松尾久 井386-1	20205	680 167	35° 30' 6"	137° 51' 41"	20170125 ～ 20170202	21.8㎡	保存目的 の範囲確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
御嶺堂古墳・開善 寺境内遺跡	古墳・集 落跡	古墳	古墳周濠	須恵器・埴輪		周濠から埴輪等が出 土した。		
兼清塚古墳	古墳	古墳		近代陶器		墳丘と集石を調査		
御射山獅子塚古墳 ・松尾北の原遺跡	古墳・ 集落跡	古墳	古墳周濠・土坑	須恵器・土師器		御射山獅子塚古墳の 周濠の状況を調査		
要 約	<p>御嶺堂古墳・開善寺境内遺跡では、周濠の一部を調査し、比較的まとまった埴輪が出土した。</p> <p>兼清塚古墳では、墳丘の一部と水平に近い配置の集石を調査し、葺石の可能性が考えられた。</p> <p>御射山獅子塚古墳・松尾北の原遺跡では、古墳周濠の規模と転落石の状況を調査した。松尾北の原遺跡では、墳丘削平後の土坑を検出した。</p>							

飯田古墳群
範囲確認調査・緊急発掘調査報告書
—平成27年度～29年度—

2019年3月29日 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
長野県飯田市教育委員会
印刷 有限会社 飯田写真印刷
